て滿洲の兵匪と何等擇ぶ所なしとす、之を强ひて解散せむと欲せば武力を以て掃蕩するの外手段なく、列國が協力して支那に出兵して其目的達成の擧に出でんか支那四百餘洲は忽ち動亂の修羅場と化し、支那統一は反て支那攪亂の結果に陷るべきは火を睹るより明にして、想はざるも甚しとす。吾人より觀れば、調査委員の支那統一論は一顧の價値なき一場の空想と評するの外なしとす。

二、調査委員が前記報告書の一般解決原則第十項に於て『滿洲問題解決の諸條項は支那に强固なる中央政府なくして實行し能はざること』を强調せるの一點は實に賢明なる觀察にして吾人も衷心より同意を表する者なり。

雖然强固なる中央政府の樹立の不可能なるは前掲の理由に依つて明瞭なるが故に、强固なる中央政府の成立迄は調査委員の提示する解決案は自然不可能なるの理由に歸着するを以て、調査委員は宜しく其提案を撤回して其不明を天下に謝するの義務あるものと認む。

三、最近に至り支那政治家中には聯盟乃至米國を賴むに足らずとし、他力本願の外交の不可を悟り、日本と直接交渉に依り滿洲問題を解決するを有利とするの氣運漸次擡頭し來りたるの觀あるは支那國民は勿論、日本の爲めにも洵に喜ぶべき現象にして、尙ほ進んで支那國民が東洋平和の爲めには日支の親善を圖り、兩國堅く相提携し歐米人の東洋征服策に抵抗せむことを衷心より熱望すと雖も、滿洲問題に關しては支那が滿洲國の獨立を認容し、日滿兩國の提携を首肯するを前提とするにあらざれば如何なる條件の下にも直接交渉は全然之を拒否せざるべからざるなり。（昭和七年十月十二日）

明倫會第二回懇談會に於て

陸軍大將　田中國重

私は明倫會準備委員を代表して一言御挨拶を申述べます。

這般明倫會の聲明書、主義綱領規約等を御手許に差上げまして、本會設立に關し、各位の御贊同を仰ぎました所、幸に御快諾を得ましたので、親しく謦咳に接し、御高見を拜聽し、且各位の御盡力に依り、多數の同志を糾合し、以て本會の前途を開拓致し度いと存じ、本夕態々御足勞を煩しました所、斯く多數御參集下さいましたことは、私共の洵に光榮とし、且つ本懷に存ずる所でありまして、衷心より感謝の意を表したいと存じます。然るに設備萬端不充分でありますから、不行屆の點は御寬容を御願ひ致します。何れ後刻各位の御腹藏なき御高見を拜聽致し度いと存じますから其節は何卒胸襟を開かれまして、御懇談あらむことを切望致します。就きましては、此機會に御參考の爲め明倫會發起の趣旨內容の概要を私より申述べまして、暫時御淸聽を煩したいと存じます。

扨て不肖田中、其性來の魯鈍を顧みず、同志と相提携し、正義の旗幟を翻し、奮然として陣頭に起ちました動機は、曩に御高覽に供して置きました、聲明書及主義綱領、規約等に明示してありますから、大體御承知のこと